

V. 小樽商科大学 学生研究奨励事業第1回「学生論文賞」について

学生研究奨励事業「学生論文賞」の創設について

CBCが前身の経済研究所時代より主催して行ってきた「学生懸賞論文」は近年応募数が減少傾向にあり、また応募者の所属学科(コース)にも偏りが見られるようになってきました。このような状況に対して「学生懸賞論文」の全学的な認知度が決して高いものではなくてきているのではないかと、という問題意識が、関係教員の間に共有されるようになりました。そこで、自主的な学習意欲の向上を図り、学生の認知度の向上と審査の公平性・透明性の向上を図ることを目的に、教育開発センターとの共催により「学生懸賞論文」を“学生研究奨励事業「学生論文賞」”として実施することにしました。

教育開発センターと共催することによって本事業が本学の教育の一翼を担うものであることを広く周知させることができます。また、より多くの教員が審査に参加する契機にもなります。

本事業の審査方式は2段階方式を採用しており、1次審査はプレゼンテーション方式によるもので、審査員全員による公開方式の審査を行いました。本審査では会場を公開し、応募者以外の学生が参観可能としました。研究内容の発表機会を設けることで、彼等の学習・研究への動機付けに繋がることが期待できます。また1次審査における優れたプレゼンテーションには「ベストプレゼン賞」が与えられています。そして2次審査は1次審査を通過した論文について審査員2名によって行なわれました。「学生懸賞論文」と同様の審査スタイルである2次審査に異なるスタイルの1次審査を組み合わせることで、審査基準の平準化を目指しました。

また「学生論文賞」では、1次審査・2次審査の結果・講評を、応募者それぞれに返却しています。評価のポイントが応募者に開示されることで、研究水準の向上が期待できます。「学生論文賞」では表彰の在り方にも変更を行なっています。「学生懸賞論文」では表彰はCBC内においてCBCセンター長によって行われていましたが、本事業では学生表彰の一環として学位記授与式内において学長より表彰されることになりました。

このような変更を経て昨年10月23日から27日の間をエントリー期間として募集を行ったところ学部大学院生あわせて37編の応募がありました。11月7日から9日にかけて1次審査のプレゼンテーションを行いこれを通過した29編の論文について12月中旬から1月19日までの期間で2次審査を行い、大賞1編、優秀賞2編、佳作4編、奨励賞17編を決定しました。3月19日の学位記授与式において、大賞受賞者が代表して学長より表彰されました。

小樽商科大学 学生研究奨励事業第1回「学生論文賞」結果

《学部生部門》

賞	氏名	テーマ
大賞	井原香織	零細小売商のエスノグラフィー ―鮮魚店の存立基盤に関する考察―
優秀賞	前田容子	女性労働者に対する意識と制度の変化 ～ダイバーシティ・マネジメントという考え～
	中 祐規 松本美紗	国債ポートフォリオのリスク管理
佳作	小川 亮	想像力を持った CSR 人材の必要性
	小林沙織 上田真友子 児玉 結 谷口亮介	4 つの立場から見る観光問題の本質 ～小樽市の事例をもとに～
	阿部さとみ	オーケストラに学ぶプロフェッショナル組織におけるリーダーシップ
奨励賞	高山博貴	大学における e ラーニングシステム構築の可能性
	吉田友弘	動的筋力トレーニングにおけるレペティション法の改善
	佐藤正典 杉山友紀 松田 大	仮説検証型発注システムの弱点 ―セブンイレブンを事例として―
	森 浩輝 大瀬麻巴 花田優貴 平岡 卓	踊る報酬 ～人はなぜ YOSAKOI ソーラン祭りで踊るのか～
	屋敷美奈 坂井香織 渡辺彩織	グッズ販売事業を素材とした広報活動の重要性
	萱森美緒 折田寛枝 今 亮人 土谷咲恵	ポイントカード戦略による大通駅エリアの活性化
	高田禎久	ロングテール分析とその活用
	中島 啓 菅野有記	エキゾチックオプション組み込み債権の収益性
	藤原佑輔	刑法における公務の保護
	岸 藍子	緑陰の形成に着目した街路樹配置に関する研究
	北村知子 浅野啓太 庄野幹也 堀田久実子	地球に優しい 3R ～資源枯渇への対策とその心構え～
	山本あみ	携帯電話における効率的な文字入力方式の検討

奨励賞	筒井由香理	携帯電話を利用した ATM 利用時間の短縮
	小路奈美絵	サービス業におけるマニュアル経営の実態 ～定食屋チェーン A 店の事例～
	山本絢子 佐々木俊介 中西未来	福住地区高齢化の理由とこれからのまちづくり ～老年者にとっての福住の魅力とは～
	小笠原義人 鈴木悠斗(羽田野敬一 金 台姫	バイオエタノールの可能性と経済効果
	林 襟奈 太田晋平, 笹原俊介 宮下芙弥江	ウイングベイ再・再建！！

《院生部門》

賞	氏名	テーマ
大賞	(該当者なし)	
優秀賞	(該当者なし)	
佳作	大友奈奈子	Effective English Teaching in Elementary Schools
奨励賞	(該当者なし)	

副賞 大賞 10 万円 優秀賞 5 万円 佳作 3 万円 奨励賞 1 万円

ベスト・プレゼン賞 図書カード 1 万円分

萱森美緒
折田寛枝
今 亮人
土谷咲恵

ポイントカード戦略による大通駅エリアの活性化

通称賞 図書カード 5 千円分

道野真弘 (教員) 通称「ヘルメス奨励賞」

総 評

「学生論文賞」の第1回目である今年度は、学部生部門に35編、院生部門に2編の、合計37編の応募がありました。昨年と比べて倍近い応募となっております。またここ数年の応募状況と比較しても、多数の応募がありました。学部生部門での応募者は、3・4年生のみでした。所属に関しては、商学科が過半数を占めていますが、経済学科、企業法学科、社会情報学科からの応募も増加しています。研究テーマとしては文学・言語も含まれ、本学らしく多岐に渡っているといえます。

二段階の厳正な審査の結果、院生部門では、佳作1編が入賞し、学生部門では、大賞1編、優秀賞2編、佳作3編、奨励賞17編の入賞となりました。

審査が二段階方式になった結果、第2次審査の対象となった論文は、形式面での不備を指摘されるものが殆んどありませんでした。第1次審査が行なわれたことも、論文水準の向上に繋がったと考えられます。

上位入賞者の論文は、特に第2次審査において査読担当者から高評価を得ている傾向があります。奨励賞の論文に比べて、方法論の妥当性、論理構成の確実さなどの点で優れていたようです。奨励賞の該当論文は、先行研究のサーベイ不足、論理構成の弱さが指摘されているものがあります。また幾つかの論文では、ユニークな着眼点を示したものの検証が十分でないため、思いつきに留まる・客観性に欠けている等の指摘がありました。高い水準を目指す学生諸君には、応募にあたり、論文作成の基本的な作法のほか、テーマのユニークさを客観的・一般的な水準に高めるための「学術的な裏づけ」も修得されることを望みます。

また、「学生論文賞」では二段階の審査のどちらにおいても、応募者への評価のフィードバックが行なわれています。これは、論文執筆のノウハウや研究能力のレベルアップに寄与するものですので、是非 真摯に受け止め今後に役立てて欲しいと思います。

尚、最後になりましたが、本事業の実施に対しまして、株式会社 北洋銀行様より多大なるご支援を頂戴いたしました。記して感謝の意を表します。

大賞 井原香織「零細小売商のエスノグラフィー ―鮮魚店の存立基盤に関する考察―」

商店街や街の零細小売店の衰退が話題になって久しい。それだけに再生への対応策についての研究や議論も数多く存在している。本論文も零細小売商問題という古くて新しい問題に焦点を当て、従来の研究では希薄であったミクロな視点から鮮魚店のエスノグラフィーを記述している。研究課題として取り上げられた零細小売商の存在意義を模索するために、従来の「生業性」、「家族従業」、「地域密着型小売店の多重ネットワーク構

造」などの諸概念を再検討し、それが現実の零細小売店を分析するのに妥当な枠組みであるかどうか明らかにされている。

先行研究の単なる文献レビューや分析だけでなく、それを踏まえた研究課題の設定、エスノグラフィーによる「分厚い記述」、議論の展開プロセスはオリジナリティにあふれ、多くの理論的インプリケーションを引き出すことができる。とくに「外側」から安易に評価してしまいがちな零細小売店の日常的な活動をエスノグラフィーを通じて「内側」から捉えようとした研究アプローチはきわめて興味深い。また、零細小売商、とりわけ鮮魚店の存立基盤の一つとして、「小売技術」という概念に着目したことが本論文の大きな特徴であっただろう。これらの点において本論文は学術論文として高く評価される。

もっとも、本論文で強調されている「小売技術」の概念が「生業性」や「家族従業」の概念に代わる零細小売商の存在意義を解明するための新しい分析枠組みにするのであれば、高い「小売技術」を持つ鮮魚業種店は同様な商品を取り扱っている他の小売業態より競争上優位であるかどうか、また「鮮魚店という業種特有の技術」とは何かについて、さらなる研究の進化が望まれるだろう。

優秀賞 前田容子「女性労働者に対する意識と制度の変化 ～ダイバーシティ・マネジメントという考え方～」

筆者の問題意識は、1986年に施行された男女雇用機会均等法が女性労働者の働き方にどのような変化をもたらしたのかということにある。特に育児休業制度の導入状況、女性労働者に対する社会的意識の変化に注目する。そして、法制定の背景や法改正の経緯を調べ、さらに女性労働の現実肉に薄する。そのために、学生に対するインタビューや企業の具体的なケースを分析する。その結果、問題解決のための有効な考え方として「ダイバーシティ・マネジメント」という考え方を提言する。それはある種の経営戦略で、従業員の性別・年齢・国籍などの違いや発想・価値の相違を認め、さらにそれを生かすことでビジネス環境の変化にすばやく適応し、利益の拡大につなげるという戦略的発想である。この問題の解決のためには企業がこのような経営戦略として取り組むことが重要であることを強調している。

この論文は、女性労働者の働き方という、今日の日本にとって非常に重要なテーマを取り上げており、また論文形式も整ったものとなっている。また、具体的な企業のケースを詳しく分析し、さらに学生に対するインタビュー調査を試みている点などは、論文の説得力を大いに高めている。論理構成の面でも着実に論理を積み上げている点は高く評価しうる。

他方、改善すべき点ないし今後の課題を挙げるとすれば、以下の点を指摘することが

できる。

- (1) 学生に対するインタビュー調査に関して、調査対象数・実施方法等を充実させ、統計的処理を行えばさらに説得力を増すであろう。
- (2) 「ダイバーシティ・マネジメント」という人事・労務経営戦略において女性労働を活用することを強調しているが、企業のその他の経営戦略例えば財務的経営戦略との関連さらには企業目的との関連において詳細な検討が加えられれば、より現実的な議論になるであろう。

優秀賞 中 祐規 松本美紗「国債ポートフォリオのリスク管理」

本論文のテーマは「国債ポートフォリオの金利リスクを、デリバティブ取引によってヘッジする手法について」検討するということにある。具体的には、金利上昇期待の局面で、保有国債の価格下落リスクをヘッジするために国債先物や円金利スワップ先物取引を用い、他方、同じく金利上昇による逆鞘（預金金利上昇と国債の固定金利）のリスクを金利スワップ、ユーロ円 3 ヶ月金利先物取引でヘッジするという 2 つのケースを検討している。

論文では、このようなデリバティブによるヘッジの仕組みや諸概念（ポートフォリオのデュレーション等）を整理・紹介してうえで、ヘッジの実際例として稚内信金の国債ポートフォリオ（推計）を取りあげ検討を進めている。

北海道の信金は一般に預貸率が低く、債券保有がきわめて高いという状況にあって、その典型例としての稚内信金に着目し、デリバティブを用いて上記 2 つの金利リスクをヘッジしたときどのような効果が上がるか、という研究である。学んだ理論を活かし、応用しようとする現実感覚は十分評価に値する。また、実際に利用できるデータを B/S 等で追求しようとする姿勢も評価できる。全体的に、デリバティブの基本的理解の上に立って、その実践的応用を試みるという研究であり、卒論に見られがちな「習作」の枠を超えようとする意欲が感じられた。

他方、学術論文として改善が望まれる点は、①全体的に論述がやや“舌足らず”の感があり、もう少し丁寧な説明が欲しかったこと、②「注」のつけ方など改善の必要があること、③稚内信金の B/S から必要な計数を取り出して表で示すこと、等である。

佳作 小川 亮「想像力を持った CSR 人材の必要性」

本研究の始まりは「何のために働くか」という疑問であり、筆者が就こうとしている医薬情報担当者という仕事の先輩が、直接には接しないのに、患者のためという思いを

持って働く中に、生き甲斐を見いだしていることが、企業としての CSR につながっているのではないかと考えたことである。そして CSR を果たすのは会社というより、従業員からではないかとの仮説を立てる。

しからばそのような人材はどのように育つのか。筆者はまず 20 世紀前半の人である C・バーナードによって、働き甲斐の必要性について考察する。バーナードは会社から従業員へと分析して、働き甲斐の動機付けの誘因として、まず金銭等の物質、次いで支配的地位をあげる。

続いて筆者は従業員に戻って、「何を想像して働くか」が大切だとする。「想像」を「時間軸」「目的軸」「判断軸」の切り口で考えている。ここでは各々がどういうことなのかの分析を、もう少し詳しくしてほしかった。そうすれば「これらの 3 つの軸を満たす想像力が働くとき、それによって働き甲斐を感じて良い仕事を行い、結果的に CSR を果たすことになる」という、仮説に沿った議論がスムーズに入ってきたであろう。

次に筆者はジョンソン・エンド・ジョンソンの例から、トップのリーダーシップが必要と考えた。そして「企業は日々の事業活動において、従業員に社会のため幸せのために働き甲斐を感じて仕事ができる環境を用意すべきなのである。CSR はその先で果たされるものである」と述べる。

CSR は会社ではなく「従業員から」という発想はユニークだが、論理の流れには些かもどかしさがある。思うに論点は企業が十分な動機、働き甲斐を提供し、従業員が想像力を持って働けば、結果として会社は CSR を果たす、ということであろう。その相互作用のプロセス、関係をもう少し深く関連づけて考察すればさらに良いものになった。

佳作 小林沙織 上田真友子 児玉 結 谷口亮介「4 つの立場から見る観光問題の本質 ～小樽市の事例をもとに～」

現在、日本の地方都市の多くが財政の悪化に苦しんでおり、地元経済活性化への様々な取り組みが全国的に試みられている。有力な地場産業を抱える地方では、当該産業の推進に官民あわせて取り組んでいる。北海道は観光資源が豊かであり、観光を主要な産業の一つに位置づけ、様々な仕掛け、支援制度などを通じて経済の活性化に取り組んでいる。

「小樽」は観光が主要な産業の一つではあるが、それが必ずしも小樽市の経済活性化に大きく貢献していないのではないかと。それは何故か。その原因を分析し、解決への提言を試みる。これはその様な問題意識から書かれた、大変興味深い論文である。

小樽における観光振興の問題を、行政・事業者・地域住民の対立関係を中心に分析した事は新鮮な切り口からのアプローチであり、鋭い視点である。ただ、小樽が港湾都市であることを考えると、観光産業と港湾関連業者との利害対立にも踏み込んで分析が行

われたならば更に深みのある論文になったと思われる。

本件は、文献調査に留まらず、実際にアンケートや取材を駆使して本件の主張を立証しており評価できる。ただ、サンプル数が少ないことや定量的な分析をしていない点などに課題を残している。

タイトルは「(一般的な都市に共通する)観光問題の本質」とも取れるが、本論文は「小樽における観光振興の諸問題」を論じており、そのようなタイトルにすべきであった。

学生論文に要求するのは過酷とも言えるが、残念ながら本論分では最終的な解決策が具体的に提示されてはいない。

本問題は観光都市「小樽」に留まらず、日本全国の地方に共通するものであり、今後とも更なる研究の継続が望まれる。

佳作 阿部さとみ「オーケストラに学ぶプロフェッショナル組織におけるリーダーシップ」

オーケストラを素材にして、「プロフェッショナル組織におけるリーダーシップ」について考察した本論文は、オリジナリティーや現代性の面で高く評価できる論文である。

ただ、内容的にオーケストラ論に偏りがあり、組織自体を論じている部分が少ない。指揮者の分析によって得られた知見を、プロフェッショナル組織にどのように取り入れていくかの考察が十分でない。

既存の組織論との関連で言えば、自律型(自己管理型)チームやサーバント・リーダーなどに触れて、考察をしてもよかったのではないか。さらに付け加えれば、リーダーシップ論の研究の流れとして、すべての場面で当てはまる唯一絶対のリーダーシップのタイプはないという見解があり、「プロフェッショナル組織におけるリーダーシップ」も一つのタイプを良しとするのは妥当性が低いかもしれない。たとえば、研究開発のプロフェッショナル組織では X のようなリーダーシップが望ましいとしても、デザインのプロフェッショナル組織では Y のようなリーダーシップが望ましいということも十分考えられる。

方法論としては、指揮者に対する評価が若干不明瞭で、それらしき出典を見ても、それが客観性を保証するかどうか疑問が湧く。どのような手法で、またどのデータを用いて指揮者が評価されたのか、もっと明確に記述すべきではないだろうか。

構成面では、今ひとつ本論と結論が結びついていないように見える。上でも述べたように、オーケストラにおける指揮者のリーダーシップについて得られた知見が、プロフェッショナル組織におけるそれと、上手く照応していないのだ。

とはいうものの、あまり開拓されていない「プロフェッショナル組織におけるリーダ

ーシップ」という難しい領域に取り組み、一定の成果をあげたことは評価できる。

佳作（院生部門） 大友奈奈子「**Effective English Teaching in Elementary Schools**」

当該論文は、初等教育における効果的な教育方法の提案を行なうというものである。非常に今日的なトピックであり、社会的に貢献可能な内容と言える。授業計画自体も、事例を取り込むなどして非常に丁寧に準備されており、現場教育のニーズを伝えようとする熱意が感じられる。また、イギリスにおける教育と政府の政策についての情報が示され、今後日本の小学校での英語教育を実践するにあたっての有益な示唆が含まれている。

論理構造での不統一が一部あるが、結論部分の議論は非常に明確であり、評価できる。また全体的にみて、筆者の英語力も評価できる。

但し、その成果を研究論文として扱うに当たっては、課題も残る。

例えば、研究アプローチに関して、教育理論(TPA, natural approach, communicative language teaching の3つ)については、それぞれに丁寧に説明があるものの、それ以外の基礎理論についての言及は必ずしも十分とはいえない。そして、本論分で提案された教授法の独自性・有効性を明らかにするために、比較対象となる他の教授法の特色や普及度・評価などについても客観的なデータが必要であろう。全体として、提案される授業方法の丁寧さに比して、修士論文を作成するための研究計画については、詳細に述べる必要があるであろう。



学位記授与式内で学長より表彰を受ける大賞受賞者



学長を囲んで